

GLOBE *Voice*

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies 2011 Number 4

東京外国語大学



2010年春に広報誌を創刊しました。タイトルは「GLOBE Voice」。「地球」と「声(=人)」という2つの言葉を合わせた造語です。外語大の使命は、「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。そのためには、さまざまな国の文化・歴史といった、背景を知ることが欠かせません。4号目となる今号は、外語大の歴史の中でも最も長くキャンパスを置いた「西ヶ原」を特集しました。



Contents

24206日の静と動 — 3

History of TUFS — 9

学長対談 — 10
シンガー・ソングライター、作家 タケカワユキヒデ

graduated active person
in society — 16
俳優 鈴木亮平
オペラ演出家 岩田達宗

person doing research — 18
八木久美子/伊勢崎賢治/三尾裕子

コラム「聴」 — 24
峰岸真琴/川上茂信/岩崎務

歴史を刻む在学生 — 28
ドイツ語専攻4年 松山貴史

News — 31

24206日 の静と動

特集

外語大の礎
西ヶ原66年余の
歴史を解く

東京都北区西ヶ原。巣鴨、駒込に隣接し、伝統ある庭園や霊園、緑豊かな公園に恵まれるこの地に、かつて外語大のキャンパスがあった。しかし西ヶ原に落ち着くまでの道のりは険しかった。相次ぐ火災、震災、そして戦災で校舎を焼失し、各地を転々とした。まさにキャンパス受難の歴史を辿ってきたといえる。



欺かれて 楽しい 神秘の空間

文 柳原孝敦

西ヶ原キャンパスにはひとつ、重大な謎があった。正門から一号館までの間に広がる、前庭とでも呼ぶのが適した場所、左右を四号館と講堂に挟まれた猫の額ほどの狭いその場所のみを、学生たちは「キャンパス」と呼んでいたのだ。少なくともぼくの前後の代のスペイン語学科（当時の呼称）の学生たちはそうだった。芝生を敷き詰めた植え込みが三つあるだけの、あまりにもささやかな「キャンパス」だった。神秘も何もあつたものではない。

もちろん、キャンパスとは元来、校地全体を指す語だということくらいは、皆がわかっていた。前庭のほかにも、西ヶ原キャンパスには中庭も裏庭もグラウンドも存在した。事務棟（四号館）に研究棟（五号館）、講堂に体育館、図書館に三つ（AV棟を入れると四つ）の講義棟まであつた校地は、狭いなりにも大学のキャンパスとしての条件を備えていた。それなのにそうした条件を忘れて、ただ前庭のみをキャンパスと呼んだのだ。今から思うにそれは、中庭や裏庭が見えないからなのではなかったか。西ヶ原キャンパスには、なんとというか、奥行きがあつたのだ。そこに神秘が生まれた。

奥行きは高低差から作り出されていた。正門からまっすぐ歩くと講義棟一号館の入り口がある。回廊形式（口の字型）のこの建物の、正面の入り口は中三階とでもいうほどの高さで、これが口の字の底辺の二階にあたる。半階分降りた高さがほかの三辺の二階に相当するといふ具合だ。教室に遮られて廊下が途切れたりしているの、どこから入ってどう行けば目当ての教室に行けるか、慣れないうちはわからなくなる。シンメトリーゆえに方向感覚を失う府中の講義棟と違い、西ヶ原の建物はこのようにすれによって人の目を欺く。欺かれて楽しい神秘の空間だった。

口の字型の一号館の中庭の、真ん中に建っているのが図書館。一号館その口の字がわずかに開いた左下隅の切れ目のところから、図書館の入り口に通じる橋があつた。入り口は三階で、一号館の三階と同じ高さなので、橋は少し上り坂になっていた。授業をサボって図書館に向かう橋を歩いていると、左手の教室の授業風景が見えた。二階の小教室、たぶん、英米科（当時）の専攻の授業が行われているはずの教室内が見て取れた。手前の教卓に、ルー

ズリーフにびっしりと何やら書き込んだバインダーノートを広げている若い教師は、非常勤の先生なのだろう。若手らしく、頑張つて準備してきたに違いない。その講義ノートを見ながら熱弁をふるっている姿は微笑ましい。自分では真面目に授業に出ていないのに、ぼくはこんな光景を眺めるのが大好きで、欄干に肘をつけて、いつまでもその教室の中を覗いていたこともあつた。

負けず劣らず好きだつた場所は一号館の中庭、つまり一号館と図書館の間の庭だ。人工土の通路が植え込みの間に縫い、ベンチなども置いてあつたので、ひとかどの庭と呼ぶにふさわしい場所なのだけれども、「キャンパス」すなわち前庭から見れば（見えないけれども）地下にあたるその位置のせい、ほとんど人がいない、昼でも充分に神秘的なスポットだった。ここベンチに座つてタバコでも吸いながら本を読むのがぼくの楽しみのひとつだった。そんな人気のない場所を好むべくにとつても、アンタッチャブルな神秘のオーラをまとうて見える場所があつた。講堂の裏手、正門から見たら左手の角に存在する木造の家だ。キャンパス外壁の左手隅に木戸があつて、これがこの家の玄関のはずなので、まるでキャンパスの中に侵入してきた見ず知らずの他人の民家とでもいつか風情だつた。謎の建物だつた。

この家が何であるかわかつたのは、やつと二年が終わろうかというころのこと。ある日の夕方、大学からほど近いアパートに帰ろうと歩いていると、前方でその神秘の木戸が開き、そこから、少しかがむようにして初老の紳士が出てきたのだ。方向が同じだったので後をつける形になった。紳士は近くの商店街の入り口付近にある小料理屋に入つていったのだ。紳士というのはスペイン史のN先生。そういえば遠く湘南のあたりに住んでいるので、朝八時半からの一時限の授業がある前日には、教員宿舎に泊まるのだとおっしゃっていた。

謎の解けた日は神秘の消えた日だ。三年生からのぼくは真面目に授業に出ることにした。



やなぎはらたかあつ
1989年東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業。91年同大学院修士課程修了。メキシコ国立自治大学文献学研究所客員研究員。95年東京外国語大学大学院博士課程修了。法政大学助教授などを経て、2004年から東京外国語大学准教授。博士(文学)。



〈昭和20年代〉1944年(昭和19)西ヶ原校舎に木造校舎が完成し、竹平町の仮校舎を出る。翌年、空襲で焼け出され各地を点々とするが、1949年(昭和24)東京外国語大学として西ヶ原に復帰、戦災復旧木造校舎を新築する(写真右5点と上下)。1952年(昭和27)には鉄筋コンクリートの校舎も建ち始め、西ヶ原キャンパスでの活動が本格的に始まる(写真下から2点と左上2点)。



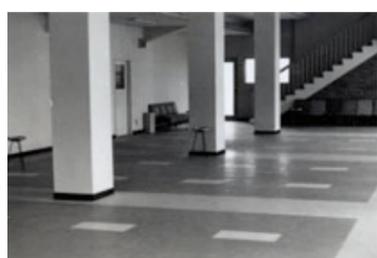
〈昭和30年～40年代〉1961年(昭和36)に創立60周年の記念講堂が完成(写真右の2点)。以降、語劇はこの講堂で上演されるようになる(講堂の外壁面には、創立80周年の記念としてステンドグラスの大時計が埋め込まれた。この時計は府中キャンパスで今も時を刻んでいる)。1964年(昭和39)には、付置機関としてアジア・アフリカ言語文化研究所が設置される。1967年(昭和42)には、2号館と体育館が完成する。写真左は1968年(昭和43)の卒業式後の謝恩会の様子。同年秋から学生運動が始まる。全共闘学生によりキャンパスがバリケード封鎖され、教室は落書きなどで荒らされた(写真下とその右)。翌年3月に、機動隊導入で封鎖が解除され、10月に授業が再開される。1971年(昭和46)に3号館、1972年(昭和47)に4号館が完成、キャンパスの整備が進む。



〈創立～昭和10年代〉写真上から、神田区錦町の校舎。1913年(大正2)に神田の大火で焼失する。麹町区元衛町の校舎。講堂や柔剣道場、図書館などもあり、学校としての機能が整備されていた。麹町区竹平町の校舎。関東大震災で元衛町の校舎が焼失したため、突貫工事で造られた。下の写真は1934年(昭和9)頃の西ヶ原校地。正門と敷地を囲む塀のみだった。



〈創立～昭和10年代〉写真上から、神田区錦町の校舎。1913年(大正2)に神田の大火で焼失する。麹町区元衛町の校舎。講堂や柔剣道場、図書館などもあり、学校としての機能が整備されていた。麹町区竹平町の校舎。関東大震災で元衛町の校舎が焼失したため、突貫工事で造られた。下の写真は1934年(昭和9)頃の西ヶ原校地。正門と敷地を囲む塀のみだった。



そんな中でも少しずつ校舎の建造を進め、1944年(昭和19)に西ヶ原に移転。戦時中だったため、「東京外国語学校」の鑄鉄製の門標は軍需材として供出された。都心一等地からの移転に、「都落ち」と嘆いた関係者もいたという。引越しが完了し、腰を据えてのキャンパス構築に向かうと思われたが、米軍の空襲により翌年校舎が焼失。焼け出された外語大は、上野の東京美術学校、図書館講習



1968年(昭和43)頃。体育館が完成。

つき、さらに消防署からは「出火したら5分で全焼する」と言われるほど粗末だったという。
 〆鶏小屋校舎での劣悪な環境に終止符を打つべく、大蔵省から海軍爆薬部跡地だった西ヶ原の土地を引き継ぎ、新校舎の建設計画がスタートしたのは、1934年(昭和9)のことだった。しかし、昭和恐慌の煽りで予算が確保できず、正門と敷地を塀で囲っただけで工事はなかなか進まなかった。

舎は、1913年(大正2)の神田の大火災で焼失。1921年(大正10)に麹町区元衛町に新築した校舎もわずか2年半後に発生した関東大震災により焼失してしまう。その後、西ヶ原に移転するまでの20年間は、麹町区竹平町1番地(現毎日新聞社本社)の木造平屋のバラック校舎(一部からは〆鶏小屋校舎)と言われていた)を使用することになる。この仮校舎は、日当たりが悪く日中でも常に電灯が



1959年(昭和34)頃。右下は木造校舎。

〆キャンパス受難の歴史 仮住まいの外語大
 外語大は、1897年(明治30)に高等商業学校附属外国語学校として創立した。114年にわたる外語大の歴史は、66年の時を刻んだ西ヶ原時代を抜きにしては語れない。創立から現在の府中に移転するまで、キャンパスはどのような移り変わっていったのか――。
 創立の地である神田区錦町の校

History of TUFS

外語大と墓地との不思議な縁

外語大は墓地に縁がある。西ヶ原は染井霊園、府中には多磨霊園が、どちらもキャンパスから徒歩数分の場所に位置している。染井霊園は、幕末期の幕臣、明治政府の要人をはじめ、大勢の文化人や政治家らが眠る。特にロシア文学の翻訳家でも知られる二葉亭四迷は、外語大にとって縁のある人物だ。『浮雲』など言文一致の文体を先導した四迷は、外語大の前身である東京外国語学校でロシア語を学び、後に教壇にも立った。ほかに、芥川龍之介や谷崎潤一郎、『遠山の金さん』で知られる遠山金四郎らが周辺の寺院に眠っている。桜の「ソメイヨシノ」の発祥の地としても知られるこの地は、春にはたくさんのソメイヨシノが満開となる。西ヶ原時代は染井霊園を通学路にしていた外大生も多かったという。染井霊園を散策がてら、西ヶ原キャンパス跡地に足を延ばしてみたいかだろうか。▼



二葉亭四迷(本名・長谷川辰之助)の碑。
筆名は、文学を志すことを嫌った父に「くたばってしめえ」と怒鳴られたことに由来するという説も。

〈上〉西ヶ原キャンパス跡地は東京都北区の防災公園と集合住宅、福祉施設となっており、スカイツリーが望める。
〈下〉西ヶ原キャンパスにあった樹木の一部は、現在も成長を続けている。



墓石を辿り、偉人を偲ぶ

染井霊園に眠る著名人

岡倉天心 (美術家)
東京美術学校 (現東京藝術大学) の2代校長。
横山大観らを育てた。

高村光太郎 (詩人、彫刻家)
代表作は『智恵子抄』。妻の智恵子と上野公園にある西郷隆盛銅像の作者である父・光雲とともに眠る。

水原秋桜子 (俳人)
高浜虚子に師事し、俳句雑誌『馬酔木(あじび)』を主宰した。

若槻禮次郎 (元首相)
昭和初期に2度にわたって内閣総理大臣を務めた。在任時にはそれぞれ金融恐慌、満州事変が起きている。

多磨霊園に眠る著名人

岡本太郎 (芸術家)
大阪万国博覧会の「太陽の塔」や「芸術は爆発だ」のフレーズで知られる。父は漫画家の一平。母は作家で歌人のかの子。

中村屋のボース (独立運動家)
本名はラス・ビハリ・ボース。インド独立運動に携わり、日本に亡命。新宿中村屋の娘と結婚し、日本にインドカレーを広めた。

東郷平八郎 (海軍軍人)
日本海軍の司令官として日清・日露戦争の勝利に貢献した。

北原白秋 (作家)
詩集「邪宗門」「思ひ出」のほか、「ベチカ」「あめふり(♪あめあめふれふれ♪)」「待ちぼうけ」など童謡の作詞も多く手掛けた。



〈昭和50年代〉右下の航空写真は、1979年(昭和54)頃。ロの字の形をしている1号館の中庭だった場所に、新図書館が完成。西ヶ原の住民に当時の外大生の印象を聞いたところ、「いい顔をしている学生が多かった。外国の文化や言葉を学ぶという、目的意識がしっかりしていたからだろう」という答えが返ってきた。



所などの仮住まいを経て、上石神井の仮キャンパスへと移る。まさに「仮住まい」の外語大である。戦後、1949年(昭和24)に大学に昇格し、東京外国語大学として西ヶ原に復帰、戦災復旧木造校舎を新築した。1952年(昭和27)には鉄筋コンクリート校舎を新築し、西ヶ原校地を引き継いで18年目にして、ようやくキャンパスがひとところに落ち着く、安定期がスタートした。以降の外語大は、これまでの苦渋の歴史を覆すかのように、次々に校舎を建築、整備していく。1952年(昭和27)から1979年(昭和54)の間で、講堂や図書館、体育館などキャンパス機能が一通りそろった。施設の整備と拡充の背景には、外国語教育の発展に伴う、学生定員増、学科増、付置研究所の設置、大学院の増強などがあった。一方で、大学の規模が大きくなるにつれ、西ヶ原キャンパスは手狭になり、新たな土地を求めるとも自然な流れだった。府中には、西ヶ原の3倍の面積が確保された。キャンパス受難の歴史は、ここで終止符が打たれたと言えそうだ。それから11年。西ヶ原時代に大学としての礎を築いた外語大は、府中キャンパスでさらなる飛躍を遂げようとしている。▼



学長 亀山郁夫対談

文・吉田輝子 写真・青木倫紀

70年代後半から80年代にかけて、日本のポップス・シーンをリードしたバンド、『ゴダイゴ』。その作曲家兼ボーカ

リストが、外語大OBのタケカワユキヒデさんだ。音楽一家に生まれ、小学校2年生で譜面の読み書きができた。ビートルズに憧れて中1でバンドを結成。外語大に進学したのは「英語の歌詞作りのため」だった。ゴダイゴの作品は、まずは英語の歌詞を作り、タケカワ氏が曲をつけ、それを日本語に訳すというユニークな方法で作られていた。76年にゴダイゴを結成、78年に『ガンダーラ』（テレビ番組『西遊記』のエンディングテーマ）が大ヒット。その後も『モンキー・マジック』『ビューティフル・ネーム』『銀河鉄道999』など数々のヒットを飛ばし、日本ポップス界の金字塔を打ち立てた。今も多くのファンを魅了する希代のアーティストが、英語と音楽への尽きせぬ愛を語る。

心に生きる音楽

たけかわゆきひで

1952年生まれ。東京外国語大学英米語学科卒業。大学在学中に、ソロアーティストとしてデビュー。76年ゴダイゴを結成。作曲とボーカルを担当する。音楽活動、執筆活動のほか、講演・テレビ番組の司会など幅広く活躍。1男5女の父親。99年度のベストアーティスト賞を受賞。著書に『娘を持つ父親のための本』（集英社）などがある。

かめやまいくお

1949年生まれ。東京外国語大学長。ドストエフスキー関連の翻訳・研究や、ソ連・スターリン体制下の政治と芸術の関係をめぐる著書が多い。主なものは『ドストエフスキー 父殺しの文学』、翻訳『カラマーゾフの兄弟』罪と罰』ほか。



ゲスト

タケカワユキヒデ氏

シンガー・ソングライター、作家

亀山郁夫学長（以下、学長） お父様の武川寛海さんはベートーヴェン研究者として有名ですが、僕も中学時代から、『第九』のすべて」など著書を読ませていただいていた。

タケカワユキヒデ（以下、タケカワ） 父は20年前に亡くなりましたが、もし生きていたら喜ぶでしょうね。

英語の歌詞を書くため 外語大に進学

学長 ところで、タケカワさんはどのようなきっかけで、音楽の道に入られたのですか。我々の同時代体験ともいえるべき、「ビートルズ体験」のようなものはあったのですか。

タケカワ 僕は、「音楽ができて当たり前」という恐ろしい家庭で育ちました。父は音楽評論家で、母も鈴木バイオリン創業者一族の出身。2人の兄もピアノを弾いて作曲をしていました。当時、ドラムをたたき始めた次兄に初めてビートルズを聴かせてもらったのは、小5の時のことです。

学長 そういう環境に育つと、自然に鍛えられますよね。

タケカワ 中1の終わりに同級生とバンドを始めました。ある日、仲間が日本語で歌詞を書いてきて「これを英訳して曲をつけてくれ」と言っんです。サビの部分が、「サンキューこれだけ、サンキュー君にだけ、アイラブユー」という歌詞で、和英辞書で「これだけ」を引くと、たくさん羅列してある中で「only this

30年を経た今も、 音楽の新しさに 驚かされます

——亀山

much」が、いちばん格好いいと思った。選択を間違えているのですが、当時はそれがわからな。じゃあ、「thank you only this much」だ……。そんな調子で歌詞と曲を作り、歌ってみたらすごくよくて（笑）。

学長 会心の出来だった。

タケカワ それまでも作曲はしていましたが、日本語だとしても唱歌のレベルを超えられない。参ったな、と思っていた頃に、自分で英語を並べてみたら、意外にも気に入った曲ができたというわけです。最高の気分でした。ただ、その時僕の訳した英語の歌詞は、とても英詞と呼べるようなものではない。それで、英語がちゃんとできるようになるまで、しばらく作曲は封印しようと思ったんです。その後の3年間は1曲も曲を書かず、ビートルズのコピーバンドとして腕を磨いて、そして最後の1年ぐらいは、お店で演奏活動もしていました。

学長 封印が解けたのはいつ頃ですか。タケカワ 高2になって間もない、英語の授業中でした。ふと、英語の歌詞と曲の着想が浮かび、ノートの端に五線を引いて曲を書き始めたんです。書き上がってパッと顔を上げると、教壇には別の先生が立っていました。

学長 それだけ集中していたんですね。タケカワ 自分でも驚きました。帰宅して早速歌ってみたら……最高で（笑）。文法的に正しい英語の曲を初めて作れた。それがきっかけで作曲りを再開しました。1年間で40曲は書いたんじゃないかな。ファーストアルバムの収録曲の一部は、

90歳になっても、 『銀河鉄道999』を 歌っていたい

——タケカワ

『ハビネス』も含めてこの時期の作品が収められています。

僕としてはそのビートルズのコピーバンドで世界を目指したかったんですが、高2の夏休みにバンドが解散。進路について父に相談すると、「芸大に行つて作曲を学んだらどうだ」と勧められました。それで、クラシック音楽のハーモニーとピアノを習い始めた。ただ、いちばんやりたかったのは「英語を話せるようになること」。ポップスの英語に近づぐためにも、今度は話し言葉で詞を書けるようになりたかった。

学長 それで、上智大学の英語学科を志望されたわけですね。
タケカワ はい。ただ高校時代の英語の成績は「3」。1年目は上智と音大に落ちて、奇跡的に横浜国大に合格しました。大学に通い始めたものの、その年の夏頃に「やっぱり英語を一からやり直そう」と思い、10月から3カ月間、家から一歩も出ずに受験勉強に励みました。

学長 そして、翌年、外語大でも最難関の英米語学科に合格された。

タケカワ ハッキリ言えるのは、「数学で外語大に合格した」ということです。二次試験の数学は満点でした。一次試験の英語のほうも、奇跡的に通りまして。

学長 神通力が働いたんでしょうね。
タケカワ 兄貴に言われました。「お前が芸大に入っても驚かなかったけど、外語大に入れたのはビックリだ」って(笑)。横浜国大の友達も、「お前が外語大に入るのなら、俺にもできるはずだ」と言つて、公認会計士試験に合格しちゃった。

やりたかったことではありませんでした。だから、『ガンダーラ』がゴダイゴの最初のヒット曲になったことは、僕としてはどこか不本意でした。でも、『ガンダーラ』のヒットのおかげで、自分がやりたいことと、世の中で必要とされていることが、必ずしも一致するとは限らないことを知りました。僕らのヒット曲の中で、僕自身が力をちゃんと発揮したと思える作品は、『銀河鉄道999』でしょうか。

今でも多くの人が 僕の歌を愛してくれる

学長 話は変わりますが、タケカワさんは99年に、ベストフアーザー賞を受賞されています。1男5女の父親として、どのような教育観をお持ちですか。
タケカワ いちばん大事にしているのは、「世の中の常識にとらわれずに、自由にやらせる」ということです。例えば、うちの長女と次女は、音大付属の高校に通っていました。長女は、大学と大学院で栄養学を専攻して管理栄養士になりました。次女も、大学で文化人類学を専攻して、大学院まで行きました。ただ、普通の人があまり考えないような進路を取ること、子どもに疎外感を抱かせないよう、子どもたちを精神的にもできるだけサポートすることを常に心掛けてきました。もう一つ、これは自分が成長するのにも役立つことですが、子どもに質問されたことには、すべて答えるように努めました。



学長 それは大切な精神ですよ。僕は、子どもの問いかけに丁寧に答えるのを怠ったほうでして、今、ちょっと後悔しています。もう一つお聞きしたいのは、東日本震災のことです。タケカワさんは1人の芸術家として、震災とどう向き合われたのでしょうか。
タケカワ 先日、被災地の避難所を慰問させてもらいました。たくさんの方の前



で、ヒット曲を歌って喜んでもらえました。でも、慰問をしたからといって、被災者の方々が抱えている問題が解決するわけではない。音楽が人の助けになるのは、ある程度、状態が安定してからだろうと思うんです。本当につらいとき、好きな音楽が自分を救ってくれる、ということはあるかもしれない。でも、中ぶらりんな状態で避難生活を送っている間は、

不本意だった 『ガンダーラ』の大ヒット

学長 それはすごい(笑)。ところで、タケカワさんの代表作の一つに『ガンダーラ』があります。これは、78年にテレビ番組『西遊記』のエンディングテーマとして作られたんですね。この曲で素晴らしいと思ったのが、サビで「Gandhara」とワンクッション入るところ。これが絶妙だと思いました。
タケカワ ありがとうございます。僕がこだわっていたのは、英語の曲ならではの格好良さ。だから、英語のところを褒めてもらえる、うれしいです。

学長 メロディーラインに乗った英語の響きが、本当に自然なんですね。それは、語学力の問題というより、英語の音に対する感覚、リズムに対する感覚の問題だと思います。YouTubeでライブの動画を見たんですが、2カ月前に「これは天才の音楽だ」とコメントを書き込んでいた人がいました。発表から30年たっているにもかかわらず、今、聴いても新しいと感じられる。ただ、『モンキー・マジック』などの曲と比べると、『ガンダーラ』にはインド趣味に加えて和風の痕跡もありますね。
タケカワ 僕の音楽の出発点は『ガンダーラ』ではないんです。『ガンダーラ』は、デビューの数年後に書いたもの。当時の僕は東洋、特にアフガニスタンの民族音楽に凝っていました。偉大なパワーを持つ民族音楽や日本の雅楽などに出会

まず無理だと思っています。「つらいでしょうが、今のこの時間だけは音楽を聴いて忘れてください」なんて、無理な話だと感じました。
学長 それは僕も思います。人間が豊かな経験をするためには、気持ちの中に豊かさがないと行かない。貧しさは心を固く閉ざしてしまいます。芸術がいかに偉大な力を持っているとはいえ、生きる希望や夢が持てる状態になれば、何かに感動するという経験は得られない。
タケカワ 残念ながら、その通りです。もちろん、音楽自体が子どもたちの希望になる、ということはあります。貧しい国の子どもたちが音楽やスポーツに夢を託し、自分を高める手段とするにはあるかもしれない。ただ、今回のような災害に見舞われた被災者の方々を癒やすだけの力は、音楽にはないですね。「癒やす」前に必要なのは「再建」だ、と思いました。

学長 しかし、「災害で財産をすべて失った」ということは、子どもには理解できない。わからないということは救いでもあり、その意味でも子どもには可能性があると思います。79年にユニセフ国際児童年の協賛曲として『ビューティフル・ネーム』を発表されていますが、本当に見事な曲ですね。しかも、今でも楽曲が残っているというのは、幸せなことではありませんか。
タケカワ そうですね。『ビューティフル・ネーム』に限らず、今でも僕の曲を覚えていてくださる方はたくさんいます。そして、僕の歌を聴くととても喜んでく

い、これはアジアも捨てたものではないな、と感じていた。それまで、アメリカ的な音楽はある程度消化できたつもりでしたが、それだけに、アジアの向こう側がミステリアスに感じられたんです。実は、当時、僕が自宅で作ったデモテープがシリーズでCD化されているのですが、その中に、最初に作曲した時の『ガンダーラ』が入っています。今、聴いていただけですか。
学長 なるほど。『ガンダーラ』もオリジナルの英語版のほうは、日本語版よりもアメリカ的な印象ですよ。
タケカワ 最初に作曲した『ガンダーラ』は、発表したものとは曲調が違います。みなさんがご存じの『ガンダーラ』はマイナー(短調)の曲ですが、もともとはメジャー(長調)で始まる曲でした。それが日本風の曲になったのは理由があるんです。当時は事務所が経済的に大変でゴダイゴも解散するかどうかの瀬戸際でした。みんなヒットが欲しかったんです。そんな折、プロデューサーがその中にヒットの光を見いだしたのが、短調で書かれた『ガンダーラ』のサビの部分だった。「これ、サビがいいよ。曲を全部、短調に書き換えてくれないか」と言われました。僕としては、もちろん断れない。その結果、相当和風になったわけです。

学長 なるほど。でも、あの曲調の懐かしさがあつたからこそ、『ガンダーラ』は大ヒットしたのではありませんか。
タケカワ 間違いありません。ですから本当によかった。ただ、それは「僕」が

れるんです。でも、うぬづけないようにいつも思っているのですが、それは必ずしもメロディーの力だけではない。曲そのもの、その時代に自分自身が体験したこと、その記憶が、分かち難く結びついていくからだと思います。ただ、発表当時からかなり時間がたつても、僕の曲がたくさんの人の心の中に生きています。それは本当に幸せなことだと思います。
学長 私も音楽はかなり聴き尽くしてきたつもりですが、タケカワさんの生み出す音楽の新鮮さには、改めて驚かされました。タケカワさんは今年で59歳ということですが、どんな60代を迎えたいとお考えですか。

タケカワ 今、「プロツールズ」という、コンピュータを使ったレコーディング・音声編集機器が成熟段階に入っています。これはスタジオが丸ごとコンピュータに入ったようなもので、この機器を使えば、オーケストラから何から、自宅のスタジオで何でも1人でできてしまう。今、これを使って作曲しているんですが、あと30年は楽しめようと思います。
学長 自分のイメージする音楽が実現できる可能性が広がって、この先、何十年でも生きたくなくなってしまうんですね。
タケカワ そうなんです。先日、テレビで85歳のトニー・ベネットが歌っているのを見たんですが、声も全く衰えてないし、ちょっと踊ったりして、すごく格好よかったです。トニー・ベネットが85歳でいくなから、こっちは90歳で『999』を歌わなきゃいけない(笑)。これからの楽しみです。■



graduated active person in society_02

オペラで人間存在の輝きを追求したい

岩田達宗

オペラ演出家

外語大在学中から舞台の仕事を手掛け、30歳でオペラ演出家としてデビューした岩田達宗さん。現在、3年先までスケジューリングが埋まるほどの人気ぶりだ。

詩人・仏文学翻訳者として知られる安東次男教授に憧れて、1981年、外語大フランス語学科に入学した。1年次の成績は1科目を除きすべて「優」。いずれは安東ゼミで学び、言語学者になるつもりだった。ところが、その安東教授が2年目に突然退官。ショックのあまり学業意欲を失ってしまう。

だが、この「安東ショック」が、岩田さんを未知の世界へと誘うことになる。当時はバブル景気で、海外のオペラ劇場の来日公演、通称「引越し公演」が盛んだった。先輩から荷物運搬のアルバイトを紹介され、岩田さんはオペラの現場で働くようになる。

「生身の肉体で圧倒的な声を聴かせるという意味では、オペラとはスポーツのようなもの。膨大な時間と労力、億単位の資金が数時間で蕩尽され、歌手の声に収斂していく。そのしびれるような魅力に



語劇の経験が今に生かされている。

いわた たつじ

1986年東京外国語大学フランス語学科卒業。大学在学中から舞台監督集団「ザ・スタッフ」に参加し、91年から栗山昌良氏に師事。96年五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。主な演出作品に、日生劇場「カルメン」、びわ湖ホール「ジプシー男爵」、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス「ドン・ジョヴァンニ」などがある。

ブルブルと引き込まれていったんです」

卒業後、劇団の演出部を経て、96年にオペラ演出家としてデビューし、数々の作品を手掛けてきた。「オペラ公演には歌手やオーケストラ、裏方などさまざまな分野のプロが結集します。ですので、オペラ演出家にはリーダーシップ以上にフォロワーシップが求められる。歌手のメンタルケアも演出家の仕事。この面倒くささが、何ともいえず面白いんです」

百戦錬磨のプロ集団をまとめ上げる人心取攬術と言語センスは、外語大時代に磨かれたものだ。在学中には外語祭の語劇で、近松門左衛門やイヨネスコを上演した。「外国語での演出に戸惑いを感じないのも、語劇を経験したからかもしれない」

来年初、4つの新作・日本語オペラの公演を予定している。「作品を通じて、21世紀のオペラの可能性と新しい人間存在の輝きをお客様に提示していきたいですね」と岩田さん。理想の舞台づくりへ今日もまい進する。▼



graduated active person in society_01

自分で動かないと何も始まらない

鈴木亮平

俳優

「将来、俳優になるには東京に行くしかない。英語が好きだったので大学は外語大に決めました」

そう述懐する鈴木亮平さんは現在、大手芸能事務所ホリプロに所属する若手俳優だ。

子どもの頃から映画が大好きで、映画館に通い詰めるうちに、いつしか自分も演ずる側に立ちたいと思うようになった。

大学では演劇サークルに所属し、プロデューサー的な役割を果たしたことも。

「マイケル・ジャクソンが好きで、彼をテーマにした芝居を演出しました。脚本や舞台監督の役割をこなし、ダンスの振り付けも担当しました。もちろん、僕も出演しています」

夢の実現に向けて本格的に動いたのは大学3年生の時。

「一般的な就活と違って会社説明会がないので、『今から履歴書を持ち込みたい』と電話をかけるんです。最初は受話器を持つ手が震えるほど緊張しました」

数十社を回ったものの、なかなか所属先は決まらなかった。だが、



既に役者の道を決めていた大学時代。

すずき りょうへい

1983年生まれ。兵庫県出身。2006年東京外国語大学外国語学部欧米第一課程英語専攻卒業。英語検定1級。特技(洋)は、テーブルマジック、裁縫(洋服リメイクなど)。2011年7月には、自身初となる月9ドラマ「全開ガール」(フジテレビ系)にレギュラー出演し、西野健太郎役を好演した。

「ここで諦めない人間だけが、結果を出せるんだ」と、自分で自分を励まし続けた。

やがて事務所が決まり、日本初の水着キャンペーンボーイとしてデビューを果たす。その後、現在の事務所へ移籍した。

「自分から動き出さないと何も変わらないのだと実感しました」

実は、鈴木さんの言語に対するこだわりは相当なもの。大学では言語学や意味論を扱う宗宮喜代子教授のゼミに所属。教授は鈴木さんが脚本を手掛けた外語祭の舞台を見て「オノマトペ(擬声語や擬態語)もいっぱい、言語学的にも素晴らしい」と絶賛したという。

卒論のテーマは、「映画のタイトルにみられる、ある種の法則に従った認知言語学」。

「例えば、濁音はホラーやサスペンスに向きますが、恋愛ものには向かない。「サクサク」よりも『ザクザク』のほうが強い印象を与える。それと同じことです」

ゼミ教授に褒められた記憶をはじめとする外語大での4年間を胸に俳優稼業にいそむ。▼

グローバル化に揺れるイスラムを見つめて

Interview with Kumiko Yagi

グローバル化の波はイスラム世界にも押し寄せ、中東にドミノ的な民主化運動をもたらした。そんな中、イスラム社会の根幹を成す宗教観もまた、大きく変わるうとしている。イスラム社会が、「近現代と伝統との相克」をどう乗り越えていくのか——こうした視点から研究を続けているのが、宗教学者の八木久美子氏だ。

「例えば、グローバル化の進展に伴い、イスラム市場は世界的な注目を集めています。では、イスラム的消費の条件とは何か。『イスラム教徒が生産したものに限り』『生産者が異教徒でも、イスラム法にのっとって作られたものであればOK』等々、その定義はさまざまです。興味深いのは、このような言説をリードしているのが、イスラム法学者ではなくビジネスマンであるという事実です」

こうした変化の表れともいえるのが、近年、イスラム世界で台頭する「俗人説教師」の存在だ。彼らは実業界の成功者で、欧米流の

時間管理術やマネジメント理論を、イスラムの教えと結びつけて語る点に特徴がある。「イスラムは成功に結びつく」というメッセージを発信することで、経済的な豊かさを求める民衆から絶大な支持を得ているのだ。イスラム世界の変化の予兆は、こうした現象からも読み取ることができると、そう、八木氏は指摘する。

米国で実感した 対イスラム観の差

中東への関心が芽生えたのは、オイルショックで世情が騒然としていた中学時代。外語大ではアラビア語を専攻し、「翻訳で食べていけたら」と考えていた。

そんな八木氏の運命を変える出来事が起こる。ある日、古本屋のぞくと、1冊の本が目にとまった。題名は「死を見つめる心」。がんで余命3カ月と宣告された宗教学者の岸本英夫が、闘病中の心の記録をまとめたエッセーである。

「宗教を客観的に研究する研究者として、これまで神の存在を認めなかった自分。その自分が死と直面したとき、果たしてそこで踏みとどまれるのか——エッセーであると同時に宗教学の本質を問うような内容で、とても興味を惹かれました。『私がやりたいのはこれだ』と思い、宗教学を研究することを決めたのです」

在学中、チュニジアとエジプトに1年半留学（留学中に卒業）。エジプト留学中に会った外交官と結婚し、赴任先のカタールで2年半を過ごした。帰国後、東京大学大学院に進学。修士課程を終え、博士課程に入って間もなく、ハーバード大学の大学院に移り、世界一流の研究者がひしめく環境で、イスラム研究に従事した。研究者の人数、そのレベルの高さ、そして文献の質・量ともに圧倒的な豊かさを誇るハーバード大での研究生活は充実したものだったが、イスラムに対する研究姿勢には彼我の違いも感じたという。



やぎくみこ
1982年東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒業、90年東京大学大学院人文科学研究所修士課程修了（宗教学専攻）、93年ハーバード大学大学院で修士号取得、2001年同大学院で博士号取得。東京外国語大学外国語学部助手・助教授を経て、04年から現職。

八木久美子教授

大学院総合国際学研究院・言語文化部門
グローバル化の進展は、新たな市場原理の導入をうながし、イスラム教徒の生きる社会に地殻変動をもたらしつつある。近代的思考と伝統宗教のはざまで、イスラムの人々はいかに葛藤し、それを乗り越えようとしているのか。新たな自己像を模索するイスラム教徒の挑戦。それを見つめる八木氏の視線は、鋭く、そして温かい。

文・吉田耀子 写真・山崎亜沙子

「米国人は、イスラムへの偏見から自由になろうと大変な努力を払っています。それでも、結局は独善性から脱却できず、イスラム文化を後進的と見ていることが、いろいろな場面で露呈してしまふ。米国人と比べて、日本人がいかにイスラムへの偏見から自由であるかを知りました。のみならず、アジア人として大きな発展を遂げた日本人に、イスラムの人々がいかに高い期待を寄せているかを知ったのです」

知識人の姿が映し出す イスラム教徒の社会

八木氏の主な研究テーマは、「イスラム世界における知識人の宗教観」。博士論文ではエジプトのノーベル賞作家ナギーブ・マフフーズを取り上げ（『マフフーズ・文学・イスラム』06年刊）、知識人の旅行記などを分析対象とした『アラブ・イスラム世界における他者像の変遷』（07年刊）も上梓。終始一貫、イスラム教徒の知識人を研究対象としてきた。「知識人は、社会を内側と外側から同時に見ているところがある。自分が属する社会から離れられず、



イスラム教の聖典「コーラン」。豆本タイプやペンダント・タイプなど、さまざまな種類がある。

それでいて民衆と同化することもできない。同じ信仰を持つ者として周囲の人々に対して、時に腹を立てながらも、共感する自分がいる。どの一線を越えれば、自分はイスラム教徒でなくなってしまうのか——そう問い続ける知識人の姿には、イスラム教徒の社会が抱える問題の本質が、より切実な形で表れていると思えます」

しかしながら、宗教と近代的知性との相克は、イスラムに限った話ではない。八木氏自身も生い立ちの中で、同じような葛藤を感じてきたという。

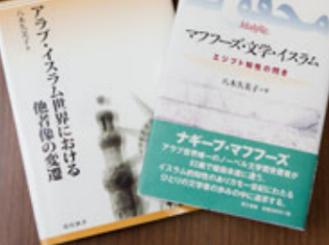
「母がキリスト教徒だった影響で、私自身も幼い頃から『宗教とは何か』という問いと格闘せざるを得なかった。だから、迷わない人々には興味がない。葛藤を抱えながら、どのようなプロセスを経てゴールに至ったのか、その作法を知ることが、その社会を理解する突破口のように思えるのです」

現在の研究テーマは「グローバル化時代のイスラム」。地球規模で人や情報が動くグローバル化の状況が、イスラム社会の構造にどのような変化をもたらしているのか。その変化のプロセスを見つめ

ていきたい、と八木氏は語る。「イスラム金融、イスラム運輸、イスラム商品——今後は経済活動とイスラムが結びつき、新しい市場価値を生み出していくでしょう。『どのような消費がイスラム的か』を規定することは、イスラム教徒があるべき自己像を再構築する作業でもある。その過程に注目していきたいと思えます」

これまで外語大、東大、ハーバード大という3つの大学を経験してきた八木氏。その経験を通じて、外語大の強みを実感したことも少なくないという。

「ハーバード大は人材や研究環境には恵まれています。米国という強者ならではの思い込みや偏見に縛られている面もある。東大は、学問の方法論が厳格で専門性が深い半面、フィールドワークへの準備は必ずしも十分とはいえない。外語大のすごいところは、語学教育もさることながら、その国の人と同じかに接し、慣習や生活文化を肌で感じる機会がふんだんにあることです。自国の文化と異文化を擦り合わせる方法を学ぶことができる——それが外語大の素晴らしさだと思います」



イスラム教徒知識人の宗教観についての研究成果をまとめた著書。

紛争の現場から平和構築の方法を模索

Interview with Kenji Isezaki

9・11を発端として、世界中が注目したアフガン紛争。だが、タリバン政権瓦解後の武装解除に当たり、日本政府が主導的な役割を果たしたことは意外に知られていない。その陣頭指揮を執ったのが、現在、大学院で Peace & Conflict Studies (平和構築・紛争予防講座) を担当する伊勢崎賢治氏だ。

今こそ国際協力の専門家として知られる伊勢崎氏が、最初からその道を目指したわけではない。早稲田大学で建築を学び、大学院では都市計画を専攻。「日本よりも都市計画が活かせるような」インドに活路を求め、政府国費留学生としてボンベイ(現ムンバイ) 大学大学院に留学した。ここで伊勢崎氏は、後のキャリアに直結する「ソーシヤルワーク」と出合う。「ソーシヤルワークとは、福祉の向上のために『社会を変える』ことを目的とする行動社会学の体系のこと。『なぜ貧困が起るのか』を分析するだけでなく、実際に貧

困をなくすための手法を研究するのがソーシヤルワーク。ボンベイ大学では、交渉術や人々を説得する技術、人々を組織して要求運動を起こす手法などを学びました」

ボンベイ大学を1年で中退し、スラムの住民組織を支援するNGO(非政府組織)に参加。スラム街で生活するうちに住民運動を指揮する立場に変わっていった。だが、公安当局から目をつけられ、国外退去命令の憂き目に。帰国後、世界最大規模の国際NGO『プラン・インターナショナル』に就職した。1988年のことである。

伊勢崎氏は、妻と生後2カ月の長男、66歳の母を連れて、アフリカのシエラレオネに赴任。1県の農村開発を任されて、あらゆる公共インフラを整備し、外国人として初めて市会議員にも任命された。「国連の開発事業はNGOなしには成り立たない。大手NGOは資金も潤沢ですから、自分の責任において、自分の企画が実現できる。その成果は、幼児死亡率の劇的な

低下という形で表れました。現地の人々や政府からも感謝され、大変だけ楽しかったですね」

世界各地の紛争地で武装解除を指揮

シエラレオネ、ケニア、エチオピアで11年間を過ごし、39歳の時に帰国。外務省国連政策課から、運命を変える1本の電話が入ったのは、その2年後のことだ。「東ティモールに日本人を派遣したい。国連に行ってくれないか」これを受け、2000年3月、インドネシアとの紛争で荒廃した東ティモールに、暫定政府の上級民政官(県知事)として赴任。1500人の国連平和維持軍を含む国連チームのトップとして、現地の治安維持やインフラ復興に尽力した。翌年6月には、国連事務総長副特別代表上級顧問としてシエラレオネに赴任。かつて国際NGO時代に開発を手掛けたこの国は、12年にわたる内戦により焦土と化



いせざき けんじ
1980年早稲田大学理学部卒業、86年同大学院理工学研究科修士課程修了。インド政府の国費留学生としてボンベイ(現ムンバイ)大学大学院に留学。スラム街の住民運動などに携わった後、88、89年、国際NGO『プラン・インターナショナル』で活動。2001年に国連東ティモール暫定統治機構の上級民政官に就任したのを皮切りに、シエラレオネ、アフガニスタンで武装解除を指揮。立教大学大学院教授を経て、06年から現職。

伊勢崎賢治教授

大学院総合国際学研究院・国際社会部門

戦争はなぜ起り、どうすれば予防できるのか。紛争地出身の留学生が中心となり、白熱した議論を繰り返しているのが、伊勢崎氏が担当する「平和構築ゼミ」だ。アフガニスタンなどの紛争地で、武装解除やインフラ復興を指揮した実務経験に基づく平和構築学の研究は、真つすぐに未来を見据えている。

文・吉田耀子 写真・高伸建次



2003年2月～04年3月、アフガニスタンで日本政府主導によるDDRを指揮。9つの軍閥の武装解除を行い、紛争後のアフガニスタン復興に大きな役割を果たした。

していた。この地で、伊勢崎氏は初めて、DDR (Disarmament・武装解除、Demobilization・動員解除、Reintegration・元兵士の社会復帰) を総合的に指揮することになる。

ゲリラに武器を捨てさせるのは並大抵のことではない。当時のシエラレオネでは、10代の少年兵による無差別殺戮が横行しており、現場の状況は凄惨を極めていた。「彼らはもともと革命軍だったのですが、内戦で疲弊し、殺人が自己目的化しているような状態でした。朝から麻薬をやり、いかに残酷な殺し方をするかを、ゲーム感覚で競い合っている。そういう連中を相手にするわけですから、殉職率も高かった。それはもう大変なミッションでしたね」

シエラレオネのDDRを完了した伊勢崎氏の元に、さらなる依頼が舞い込む。今度は外務省から、アフガニスタンのDDRの指揮を執るよう依頼されたのだ。03年当時、現地では暫定政府が樹立され、日本政府が復興支援に当たっていた。一方で、タリバン政権の瓦解後も、国内では9つの軍閥の間で内戦状態が続いていた。そんな中、日本主導で武装解除を進めるべく、再び伊勢崎氏が駆り出されたのである。

「一番大変だったのは、日本の外務省のキャリア官僚が頼りにならなかったこと。優秀ではあっても交渉力に

戦争と平和をテーマとする「白熱教室」を主宰

欠け、米国の軍人相手に丁々発止ができるような人が1人もいなかった。会議で議論しながら課題を解決していく作業が、日本人は全然できないわけです。これはショックでしたね」

さまざまな試練を乗り越えて無事、DDRを完了。外語大学院に教授として招かれたのは06年のことだ。現在は「平和構築学」の特別講座を担当。過去の事例を分析して、戦争を予防する方法を模索し、未来に活かすことを主目的とした研究教育を行っている。授業はすべて英語で行われ、定員は8人。アフガニスタン、イラク、米国など紛争当事国からの留学生が中心で、活発な議論が交わられるという。

「受講生の中には戦争被害者や、紛争の経験者もいる。彼らはそれぞれが異なるバックグラウンドを持っており、戦争犯罪の裁き方一つ取っても考え方はさまざまです。そういう彼らが、敵とは何か、戦争犯罪を許せるのか、といったテーマで議論するのですから、白熱しないわけがない。こうした議論を通じて『経験を相対化』することも、ゼミの目的の一つです」

残念ながら、今のところ日本人の受講生はゼロ。受講希望者はい

るものの、「真剣味が不足している」というのがその理由だ。

「理想を言えば、沖縄の基地やホームレスの問題に真剣に取り組んできたような学生に来てほしいですね。本当に熱意があるかどうかは、インタビュすればわかりやすから」

これまでの実務経験を活かして、即戦力となる人間を育てたい、と伊勢崎氏。国際協力の現場で働きたい学生は、どんどん海外に出るべきだ、とアドバイスする。「国際協力の仕事をしたいのであれば、まずは競争力のある民間企業に勤めて、常識を養ったほうがいい。貯金して欧米の大学院に留学し、国際的な仕事に就く。そんなスペインで考えることをお勧めします」



2001年6月～02年3月、内戦後のシエラレオネにて。国連のDDR部長として、初めてDDRの指揮を執った。

フィールドこそが知的創造の原点

Interview with Yuko Mito

世 界屈指の親日「国」として知られる台湾。東日本大震災では台湾から100億円超もの義援金が寄せられたことは記憶に新しい。戦前長く日本による統治を受けたにもかかわらず、なぜ日本に対して親愛の念を抱く人々が多いのか。

「日本の植民地統治が、台湾に対して特別に温情的だった、というわけではありません。しかし、戦後に大陸から国民党政権がやって来てしばらくすると、台湾人は、『祖国』だと思っていた中国が、台湾人を同等な国民と見なさず、台湾を搾取の対象としか見ていない、と感じるようになりました。また、台湾人に対する強圧的な統治もありました。このため、台湾の人々には『日本統治時代のほうが良かった』という思いがある。朝鮮と違って、台湾は日本に割譲された当時、清朝の最も辺縁地帯にあって王朝文化の伝統からも遠く、また、日本統治期を通じて、台湾を一つの实体と捉えるような

共同体意識が、朝鮮のように強固なものになっていなかったことも、理由の一つだと思います」

文化人類学者・三尾裕子氏はこう語る。

三尾氏が文化人類学と出会ったのは、中学3年の頃。夏休みの自由研究のテーマを探しに、父の書齋をのぞいたのがきっかけだった。ここで三尾氏は、文化人類学者・石田英一郎（故人）の著書『人間と文化の探求』と出会う。日本と西欧の違いを分析する手際の鮮やかさに感銘を受け、石田英一郎が創設した東大教養学部・文化人類学研究室に進学。大学院では、当時、開放路線に転じつつあった中国社会を研究対象に選んだ。

だが、改革開放間もない中国の農村で、外国人が長期のフィールドワークを行うことは難しい。そこで、代替案として三尾氏が選んだのが、「中国的な伝統社会」を色濃く残す「台湾」だった。博士課程2年目の1985年春、86年秋、台湾南部の漁村で1回目の現

地調査を実施。勇躍、調査地に赴いたものの、フィールドワークの現場は想像以上に過酷だった。

「文化人類学者が書いた民族誌を読むと、まるで『魔術』のように、現地社会の全体像が解明されている。自分も1年ほど現地の人々と一緒に生活すれば、その社会を理解できるだろう」と、単純に思い込んでいました。でも、フィールドでの生活は孤独で、言葉も思ったほど上達しない。言語も考え方も違う人々をどう理解すればいいのか、途方に暮れました。現実には、自分が思い描いていた理想には程遠かったのです」

豊かな民間信仰の世界に魅せられて

一方で、フィールドは無数の貴石を秘めた未踏の鉱山でもあった。滞在先の漁村で、三尾氏は、村人が毎日のように占いをしていることに気



占いに使う「ポエ」。竹製のものが多く、2つ1組で使用する。片面が平ら、もう片面は丸みを帯びている。

三尾裕子教授

アジア・アフリカ言語文化研究所

1990年初頭の民主化に伴い、「日本統治時代」の見直しが進む台湾。その政治的変化は、台湾の文化人類学研究にも大きな影響をもたらした。日本の植民地支配は、現地の社会形成にどのような影響を及ぼしたのか。三尾氏の研究は、植民地主義に関する人類学的な研究に新たな光を照射しつつある。



みおゆうこ
1982年東京大学教養学部文化人類学専攻卒業、84年同大学院修士課程社会学研究科修了（文化人類学専攻）。86年同大学院博士課程社会学研究科中退。2004年東京大学大学院総合文化研究科で博士号（学術）取得。東京大学助手、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、同助教授を経て07年から現職。

づく。人々は小さな椅子やポエと呼ばれる古い道具を使って神意を占うこともあれば、神がかり状態のシャーマンに託宣を求めるところもあった。そこには、時代を超えて脈々と受け継がれる、民間信仰の世界が広がっていた。

「この人たちは、なぜ毎日のように神様に聞くのだろう」

その素朴な疑問は、後年、博士論文「王爺信仰の歴史民族誌——台湾漢人の民間信仰の動態」に結実することとなる。

86年に帰国。東大助手を経て、90年に外語大のアジア・アフリカ言語文化研究所へ。その後、2回目の現地調査を行い、出産・育児で忙殺されながらも、2004年に博士論文をまとめ上げた。

「地域社会と強く結びついた民間信仰は、近代化とともに廃れていくのが普通です。ところが台湾では、都市化や近代化によって民間信仰が衰えるどころか、逆に、地域の枠を超えた広がりを見せている。なぜ民間信仰が、地域社会を

離れても信者を獲得し得るのか。博士論文では、こうした90年代の台湾における信仰のありようを明らかにしたのです」

台湾の民主化を機に「日本」を見つめ直す

一方で、三尾氏の台湾研究もターニングポイントを迎えつつあった。そのきっかけとなったのが、90年頃から加速した台湾の民主化である。国民党政権の抑圧から解放された人々は、これまで口を閉ざしてきた「日本統治時代」について公然と語り始めた。現在の台湾社会を形成した要素の一つとして、日本統治を捉え直す機運が生まれたのである。

これに伴い、台湾に専ら「中国社会の原像」を求めてきた文化人類学者は、台湾のもう一つの姿と向き合わざるを得なくなる。これまで無視されてきた「日本統治の影響」が、研究の俎上に載り始めたのである。

「かつての台湾研究は、『中国研究の実験室』と言われていました。90年代の台湾では、日本語教育を受け、味噌汁を受け入れ、日本的な倫理観を身につけた世代が健在だった。にもかかわらず、文化人類学者は日本統治の影響に目を向けて、論文でも一切触れなかったのです」

こうした研究の在り方は、台湾の民主化を機に、大きく転換を遂げる。そんな中、三尾氏も90年代末以降、台湾の文化アイデンティティーやナショナリズムの問題に着目。日本植民地経験が、現在の台湾の社会や文化の形成とどうかかわっているのかを明らかにするべく、研究の軸足を移していく。

その文脈に連なる研究の一つに、「小川・浅井コレクション」の整理・分析研究がある。これは、旧台北帝国大学の小川尚義・浅井恵倫両教授が収集した膨大な和洋書やノート、写真、記録フィルム、音声レコードなどをまとめたもので、消滅の危機にひんした台湾原

住民の貴重な言語資料や民俗資料が多数含まれている。三尾氏は2000～04年、所内外の研究者とともに、目録作りや電子化・データベース化を推進。その成果は国際的にも高く評価された。

今後は、パラオなどの旧南洋群島と台湾の比較研究を行い、「日本の植民地支配や、その後に外から入ってきた政権による支配に、現地の人々がどう向き合い、自らの社会文化を形成しているのかを明らかにしたい」と三尾氏。この研究が進めば、英仏などによる植民地支配を前提とした植民地主義研究に新たな光が当てられることになりそうだ。

「文化人類学をやっていると、誰かに出会ったときに、常識が覆される。特定の思考に凝り固まらないう生き方ができるという意味では、大変面白い学問だと思います」

火花のような人と人との出会いが、知的創造へと結びつく。そこに、文化人類学という学問のあらがい難い魅力がある。■



〈上〉台湾で使われている古い道具の一種。木製の椅子に神が宿る。神は椅子の脚を使って、机の上にまいた灰の上に字や図を書く。人々は、そこから神意を読み取る。
〈下〉台湾のシャーマン（巫者＝ふしや）。神が憑依することによって、トランス状態になり、神の託宣を伝える。



戦後の台湾における日本の植民地支配を研究テーマとする3部作の既刊2冊。

全く 知られていない未知の言語の発音や語彙、文法を、現地調査によって記述することは、言語学者のあこがれの一つだ。しかし、交通の便が格段に良くなった現代では、インドと中国の国境地帯にでも行かないと、そんな言語にはめったに出合えない（最近私のインドの友人たちが一つ見つけたという報道があったが）。

言語調査では、初めて耳にした単語の発音を精密に書き取って、そつくりマネができないうと、正確なデータが得られない。そうやっては言語学者として死活問題だから、言語学の修行段階では「聞き取り、発音、書き取り」のための音声学の訓練が欠かせない。神経を張りつめての聞き取りを2時間もやると頭が破裂しそうになる。苦勞して発音を精密に書き取ったら、次はその音を意味の区別に必要な単位にまとめる作業があり、これを音韻論の分析という。例えば日本語のラリレロの発音には、RだけでなくLやDなどの変種も混じっているが、これを精密に発音記号（国際音声字

1. 体育会系の発音訓練のススメ

アジア・アフリカ言語文化研究所教授
峰岸真琴
Text: Makoto Mingshi

母)で表記するのが音声学だ。一方、実際のさまざまな発音の違いにもかかわらず、「日本語ではLとRの違いを区別しない」と一般化し、その言語に必須の最低限の音の単位をシステムとして抽出するのが音韻論だ。

言語学者にだって聴覚の鋭い人もそうでない人もいるが、学問に必要なのは天賦の才能よりも合理的な訓練だ。耳慣れない音であっても、しよせんは人間の口で発音するのだから、きちんとしたトレーニングを真剣に受ければ、誰でも(?)そこそこ聞き取る能力を身につけることができる。こうした音声学の合理的なトレーニングは、教師と少数の生徒、できれば一対一の対面で行うのが理想だが、言語学だけでなく、外国語の発音とヒアリング能力の向上にも役に立つものだ。

残念ながら、きちんとした訓練が受けられる機会は限られている。そこで独学でできるヒアリング能力向上のためのコツを伝授しよう。学校の英語の授業では「聞こえる通りに発音しなさい」と教えられ、できないと努力が足りないかのように言われるかもしれない。聞こえるように発音したってダメ、ちゃんと聞き取れないのだから。実は「人間は母語(さらには自分の習得した言語)で区別される発音だけが聞き取れない」ので、聴くためには発音する訓練が必要なのです。

問題になるのは訓練法だ。聴くことは、話すことと同様、頭だけでなく身体を使う行為だから、筋力トレーニングに近い発想が必要

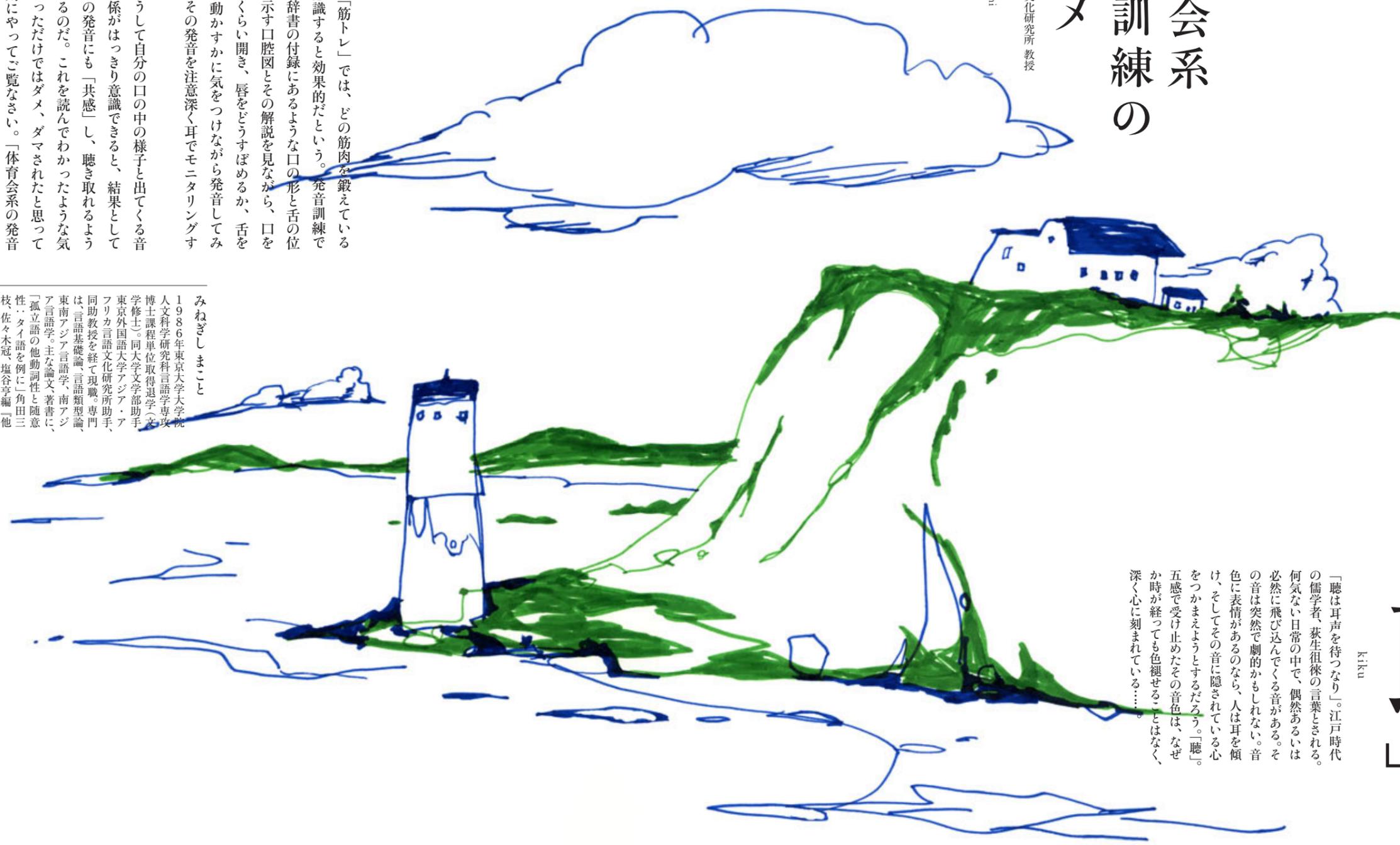
だ。「筋トレ」では、どの筋肉を鍛えているか意識すると効果的だという。発音訓練では、辞書の付録にあるような口の形と舌の位置を示す口腔図とその解説を見ながら、口をどのくらい開き、唇をどうすぼめるか、舌をどう動かすかに気をつけながら発音してみ、その発音を注意深く耳でモニタリングする。

こうして自分の口の中の様子と出てくる音の関係がはつきり意識できると、結果として他人の発音にも「共感」し、聞き取れるようになるのだ。これを読んでわかったような気になっただけではダメ、ダメされたと思つて真剣にやってみなさい。「体育会系の発音訓練」をしつこく実践するのです。真剣にしつこくやってもダメだって? それは努力が足りないの! ▼

「聴」

「聴は耳声を待つなり」。江戸時代の儒学者、荻生徂徠の言葉とされる。何気ない日常の中で、偶然あるいは必然に飛び込んでくる音がある。その音は突然で劇的かもしれない。音色に表情があるのなら、人は耳を傾け、そしてその音に隠されている心をつかまえようとするだろう。「聴」。五感で受け止めたその音色は、なぜか時が経つても色褪せることはなく、深く心に刻まれている……。

Kiku



みねぎしまこと

1986年東京大学大学院人文科学研究所言語学専攻博士課程単位取得退学(文学修士)。同大学文学部助手、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、同助教授を経て現職。専門は、言語基礎論、言語類型論、東南アジア言語学、南アジア言語学。主な論文、著書に、「孤立語の他動詞性と随意性」・タイ語を例に「角田三枝、佐々木冠、塩谷亨編『他動性の通言語的研究』」pp.205-216, 2007。くろしお出版「類型論から見た文法理論」『言語研究』171号、pp.101-127, 2000。

2.

想像力で 変換される 音の不思議

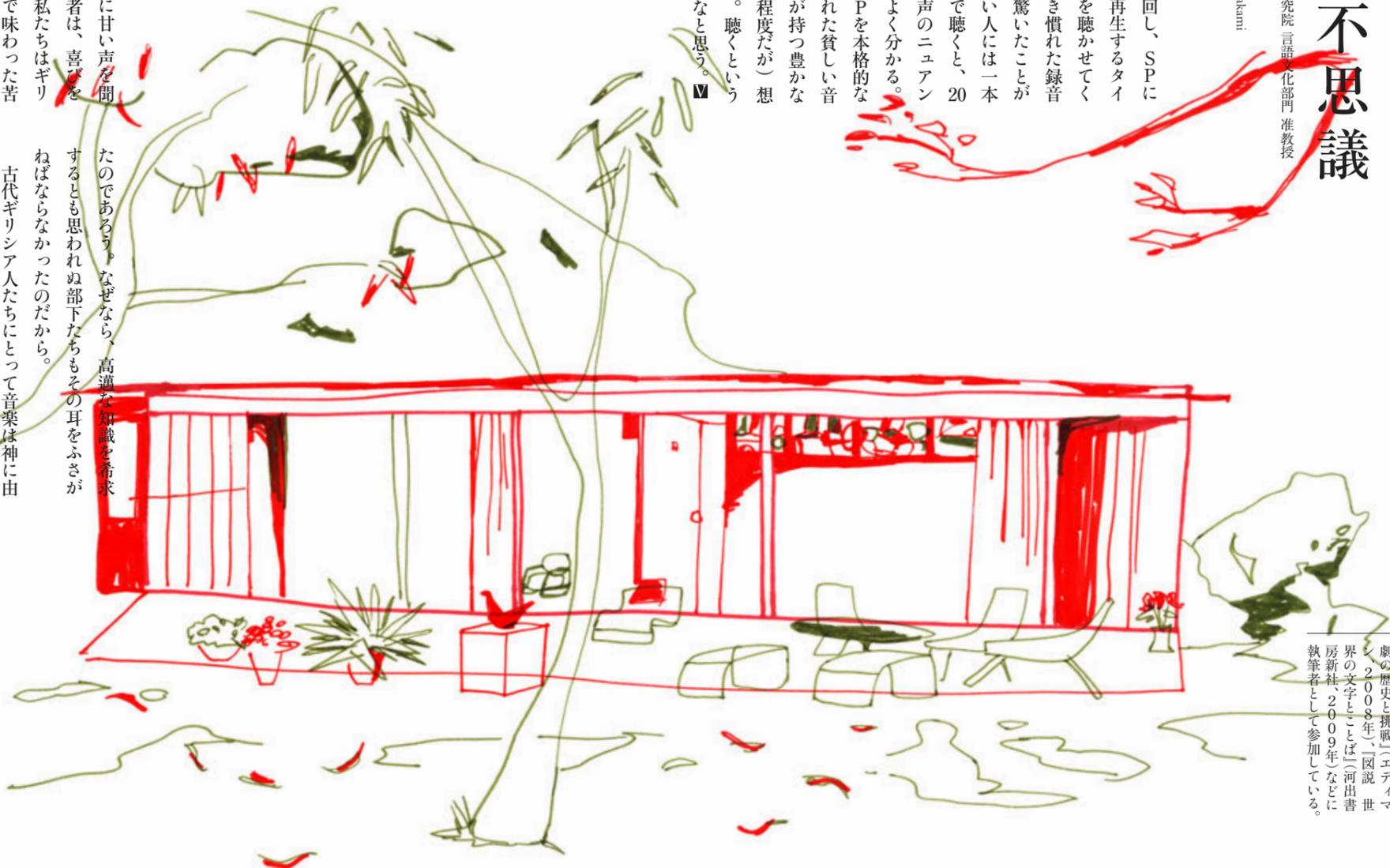
大学院総合国際学研究院 言語文化部門 准教授
川上茂信
Text: Shigenobu Kawakami

聴くのが好きだ、と言うと、スペイン語が専門ならばごく自然だと思えるかもしれない。しかし、実はスペイン語の専門家の中でフラメンコが好きで詳しい人はごく少ない。私は少数派に属する。また、一般にはあまり知られていないが、フラメンコという芸能の中心は歌（カンテと呼ぶ）で、私も聴くのはもっぱらカンテだ。しかも、最近のものは音楽的には高度かもしれないがカンテとしては薄いことが多いので、自然と古めの録音が中心になる。

フラメンコの歴史上、カンテの復興期とされる1950年代後半から60年代にかけての録音には、じっくり聴けるものが多い。また、スペイン内戦（1936-1939）以前から活躍していた名手たちの録音もCD復刻盤で簡単に聴ける。そして、これらの古い録音の中には、形容する言葉が見つからないくらい素晴らしいものがある。もちろん、復刻盤の音はたいがい貧弱だ。しかし中身が良いので全然気にならない。なにより、歌い手の声の存在感がとつもなく大きいのだ。

さて、音が貧弱だと書いたが、これは復刻盤の話で、実は、もとのSP盤の音は決して悪くはない。昔の機械式蓄音機、つまりゼン

マイ仕掛けでターンテーブルを回し、SPに刻まれた情報を電気を通さずに再生するタイプのものだと、実にリアルな声を聴かせてくれるのだ。私は、復刻CDで聞き慣れた録音をSPで聴いてあまりの違いに驚いたことが何度もある。カンテは、慣れない人には一本調子に聞こえるものだが、SPで聴くと、20世紀前半に活躍した名人たちが声のニュアンスを巧みに使い分けているのがよく分かる。面白いことに、一度本物のSPを本格的な蓄音機で聴くと、CDに復刻された貧しい音を聴きながらも、もとの録音が持つ豊かな響きがある程度（あくまである程度だが）想像することが出来るようになる。聴くというのはとても重層的な行為なのだと思う。



かわかみしげのぶ
1987年東京外国語大学
大学院外国語学研究科修士
課程修了。2002年から
現職。専門はスペイン語学。
『劇場を世界に——外国語
劇の歴史と挑戦』エディマ
ン、2008年、『図説 世
界の文字とことば』河出書
房新社、2009年などに
執筆者として参加している。

セイレーンの 魔声に潜む 知識への誘い

大学院総合国際学研究院 言語文化部門 教授
岩崎 務
Text: Tsutomu Iwasaki

3.

聴覚に

取り入って人を滅ぼすギリシア神話中の海の魔物といえ、よく知られたセイレーンたちである。通りかかる船乗りたちをその美しい歌声で魅惑し、誘い寄せ、虜にしてしまう。この話を伝える最も古い文献がホメロスの叙事詩『オデュッセイア』であり、好奇心に満ちた英雄オデュッセウスは、乗組員たちの耳には蜜蠟で栓をし、自分のみは部下に手足を縛らせ、マストに括りつけさせてセイレーンたちの歌を聞こえなくする。

オデュッセウスの船がセイレーンたちの住む島の近くに差しかかると、突然に風がやんで風いだ海にセイレーンたちの歌が聞こえてくる。後代の図像では、乙女の顔をして胸から下は鳥の姿で描かれることになるセイレーンだが、ホメロスでは外見の記述は一切ない。静まり返った海にまさに声だけが響き渡るのだ。

「船をとめて私たちの蜜のように甘い声を聞きなさい。私たちの歌を聞いた者は、喜びを得て、知識も増して帰るのだ。私たちはギリシア人とトロイア人がトロイアで味わった苦難をすべて知っている。また、大地の上で起こることをすべて知っている」。こう呼びかけられたオデュッセウスは聞きたくて堪らなくなるが、部下たちはオデュッセウスの縛めをいっそう強くし、無事に通り過ぎてゆく。

さて、英雄を引き寄せようとしたものは何であったのだろうか。のちのローマの文人キケローは、これほどの英雄がただの歌によって虜にされてしまうのでは真実味がない、彼を導こうとしたのはセイレーンたちの約束する知識なのだと言い、英雄の知識欲が刺激された話とする。しかし、本来セイレーンたちの魔力とは、やはりその歌声そのものにあっ

たのである。なぜなら、高邁な知識を希求するとも思われぬ部下たちもその耳をふさがねばならなかったのだから。

古代ギリシア人たちにとって音楽は神に由来するものであり、人間世界の彼方から来るものであった。たとえば『オデュッセイア』中に登場する吟唱詩人デモドコスも「声の美しさは神にも似る」と評される。「神のように甘美な」と形容されるセイレーンたちの歌も、神が授ける原初的な歌声であったのだろう。しかし、音楽の神ムーサから靈感を受けて物語を紡ぐ詩人ホメロスは、そして、たとえば一つ目巨人ポリュペモスを騙したように言葉にすぐれた知恵者であるオデュッセウスは、セイレーンたちの不可思議な力をもつ声に、分節された言葉、すなわち知識を聞き取ったのである。

注・20世紀の中頃まで使われていたアナログディスクの一種。

いわさき つとむ
1982年京都大学大学院文学研究科博士後期課程退学。専門は西洋古典文学、特にラテン文学。著書に、『CDエクスピレス・ラテン語』白水社2004年、『はじめて学ぶラテン文学』2008年、訳書に、『キケロー選集10』共訳、岩波書店2000年、『ローマ喜劇集2』共訳、京都大学学術出版会2001年などがある。

「人生を変えたサハラマラソン」

松山貴史
ドイツ語専攻
4年

Influential Face 歴史を刻む 在學生

Text by
Yoko Yoshida
Photo by
Misato Iwasaki



〈上〉砂地だけでなく、岩や石が転がる道を通り、山や崖を“登る”ことも。夜は5℃、昼は50℃超と気温差も激しい。
〈中〉背負って走った7日分の全食料。膝の痛みを紛らすため、お菓子を食べながら歩いた。
〈下〉“世界で最も過酷なマラソン”を共に完走したパートナー。



15kg強のリュックサックを担ぎ7日間で251kmの砂漠を走り抜く——。この“世界で最も過酷なマラソン”に挑戦し、見事完走した外大生がいる。ドイツ語専攻4年の松山貴史さんだ。

東大を目指し2浪したが失敗、外語大に入学した。サハラマラソンに挑戦しようと決めたのは、3年生の初夏のことだ。「現役で進学した高校の同級生は、もう社会で働いている。彼らとの差を覆すためにも、何か大きなことをやりたい、と考えていました」

そんな折、サハラマラソンのことを知った。幸い、根性と脚力には自信がある。が、最低100万円はかかると言われる出場費用がネックとなった。すべてを自分で賄うには無理がある。そこで、スポンサーを見つけようとマスコミ各社に接触し、文藝春秋のネットマガジン『Number Web』でサハラマラソン体験記を連載することに。その後、12社のスポンサー獲得に成功し、今年4月、勇躍サハラの地を踏んだ。

だが、レース開始早々、松山さんは膝を痛めてしまう。鎮痛剤で激痛を抑え、50℃にも及ぶ灼熱の砂漠をひたすら歩いた。伴走者付きの盲目のランナーの姿を見て心を奮い立たせ、日本から送られてくるEメールのメッセージに励まされながら、ついに251kmを完走。

「レースに完走できたことで、すごく自信がついた。何でも挑戦してみよう、と思えるようになりました」

サハラマラソンは思わぬ副産物も生んだ。練習中に東日本大震災が発生。サハラ用に立ち上げた自身のツイッターで「災害対策マニュアルの各国語版を作ろう」と呼びかけたところ、外大生の協力で、瞬間に30カ国語版が完成した。外大生の底力を実感させられた。

帰国後、『Number』別冊で連載も決まった。卒業後の進路に迷いながらも、「いずれは自分の名前です仕事ができるようになりたい」と語った。■

Takashi Matsuyama
2008年東京外国語大学入学。
就職活動を1年先送りし、2011年4月サハラマラソン(モロッコ)に挑戦、見事完走。その様子を文藝春秋のウェブサイト『Number Web』でレポートした。
大阪府出身。
<http://twitter.com/#!/saharatakashi>

いつの日か、
自分の名前で仕事が
できるようになりたい。



News

2012年4月、 外国語学部を2学部へ改編

2012年度に学部教育組織を再構成し、外国語学部を「言語文化学部」と「国際社会学部」の2学部へ改編します。

本学はこの改編により、「深く」個別的な言語・文化理解に根ざすと同時に、「広く」多言語・多文化間を透徹するようなグローバルな視座を併せ持つ、創造的かつ実践的な人材の育成に向けて、これまで以上に充実した教育を提供していきます。

改編の骨子

- 全地球地域をカバーする14地域・27言語から成る教育組織体制の整備。
- 選択した言語とその地域をめぐる基礎的な教養を培う「世界教養プログラム」の開設。
- 「言語文化学部」=世界諸地域の言語・文化に精通し、言語や文化の壁を越えたコミュニケーション能力とコーディネート能力を備え、国内外において

言語間・文化間の架け橋となり、新たな価値観の創成に寄与する国際教養人の養成。

■ 「国際社会学部」=世界諸地域の複雑な仕組みを把握し、分析するリサーチ能力と、グローバルな視点から問題を解決する実践的な能力を備え、国内外において社会、政治、経済等の領域で活躍できる国際職業人の養成。

01

中東の「いま」を伝える—— 「日本語で読む中東メディア」プロジェクト

本プロジェクトは、本学のアラビア語、ペルシャ語、トルコ語の3専攻がコーディネートし、6年間にわたって続けている中東各紙の翻訳プロジェクトです。中東の新聞社18社から翻訳許可を得て、現地のインターネット版の記事を1日平均10本翻訳しサイト上に公開しています。

翻訳は、おもに学部生、大学院生、卒業生が担当し、校閲は留学経験のある大学院生や本学非常勤講師らが行っています。プロジェクトの目的は専攻語として学ぶ言語を用いて社会貢献をするという点にあります。新聞翻訳は、語学力に加え、政治や文化、社会や歴史を知って初めて可能

になるだけに、多くの学生がプロジェクトへの参加を通じて総合的な力を身につけています。

本サイトには毎日コンスタントに2000から3000のアクセスがあり、既に日本における中東に関するニュースソースの一つとして定着してきた感があります。

ジャスミン革命やリビアやシリア問題など中東情勢が世界の注目を集めるなか、中東の新聞はどのように報じ、現地の人々は何を感じているのかを、プロジェクトを通じて伝えていきます。

日本語で読む中東メディア・サイト
<http://www.el.tufs.ac.jp/prmeis/> (「中東メディア」で検索)



03

多言語災害情報支援サイトで 22言語の情報を提供

3月11日に発生した東日本大震災は日本に住む外国人にも大きな影響を及ぼしました。被害が甚大だった岩手、宮城、福島は3県だけでも3万人の外国人が住んでいました。

多言語・多文化教育研究センターでは、震災直後に多言語災害情報支援サイトを立ち上げ、在住外国人が必要とする情報提供の支援を、22の言語で行いました。この活動は、仙台市国際交流協会、入国管理局、放射線医学総合研究所と連携し、本学のコミュニティ通訳コース修了者および語学ボランティア126人が中心となり取り組みました。語学ボランティアは、本学のOB・OG、

教職員などで組織されたネットワークです。

英語や中国語といった使用者の多い言語だけではなく、ベトナム語やインドネシア語のように使用者が比較的少ない言語もカバーできたこと、タイ語やカンボジア語のようにローマ字以外の文字を使う言語についてもその言語の文字で表記した情報を提供できたことは、外国語大学としての本学の人的資源が十二分に活用された成果と言えます。

また、日本語の情報も併記したので、

このサイトを見つけた日本人が周りにいる外国人に必要な情報を伝えることができて助かったという反響もいただきました。このサイトには、多い日には9000を超えるアクセスがあり、本学ならではの社会貢献の在り方を示すことができました。

多言語災害情報支援サイト (情報提供は6月30日で終了)
http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/tufs_disaster_information/



04

東京外国語大学出版会が 新刊2冊を發行

『アンナ先生の言語学入門』

ポーランド生まれの気鋭の言語学者アンナ・ヴェジビツカによる言語学の入門書。言語学のエッセンスをちりばめ、世界のさまざまな言葉の用例を駆使しながら、言語学の基本概念と研究課題をやさしく、魅力的に語ってい

ます。外語大で教鞭を執った言語学者の故千野栄一氏も、その平易な語り口で書かれた本書を絶賛し、翻訳出版を待望していました。外大生はもちろん、言葉に興味のある多くの方にぜひ読んでいただきたい本です。



アンナ・ヴェジビツカ 著
小原雅俊
石井哲士朗
阿部優子 訳
2011年7月25日発行
A5判/並製/331頁
定価2,100円(税込)

『〈アラブ大変動〉を読む——民衆革命のゆくえ』

民衆デモに揺れ動き、いまだ混沌の中にあるアラブ諸国は、これからどこへ向かうのか？ 酒井啓子教授を中心に外語大が誇る中東研究者たちが、アラブ世界の実情と民衆革命の趨勢を分析した論文集。2011年3月3日に

外語大で開催された公開ワークショップの記録とともに、その後の動向を考察した論考と、一連のアラブ情勢をつぶさに追ったクロニクルを収載。マスメディアが伝ええない革命の〈歓喜〉と〈苦悩〉に迫ります。



酒井啓子 編
2011年8月10日発行
A5判/並製/237頁
定価1,575円(税込)



東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

〈編集後記〉 20世紀の終わりに「独立100周年」を数えた北区西ヶ原のキャンパスへと、時おり足を運ぶ教職員が少なくなくと聞く。春が来て年度が改まると、本学は外国語学部を廃し、あらたに2つの学部を設けるというおおきな転換期をむかえる。来るべき収穫の季節に思いを馳せる前に、ゆたかな滋養を育みもたらした旧くて懐かしい場所にあらためてまなざしを。(編集子) ■

GLOBE Voice
グローバルフェイス

2011 Number 4

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2011年10月発行

発行 東京外国語大学

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

総務企画課広報係

編集 広報マネジメント室

編集協力 日経BPPコンサルティング

印刷 大丸グラフィックス

アートディレクション 大飼健二

表紙撮影 市橋織江

デザイン 茂谷淑恵(大飼デザインサイト)

©東京外国語大学2011

本誌記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。